

口蓋扁桃腺ノ肥大度ニ對スル見解

(重量測定成績ヲ基礎トシテ)

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室(主任松田教授)

富山縣産業組合病院耳鼻咽喉科

豊 田 文 一

B. Toyota

(昭和18年4月26日受附)

内 容 抄 録

剔出口蓋扁桃腺200個ノ重量ヲ測定シ、コレト年齢ノ關係、臨牀上ノ肥大度、病的症狀等ノ關係ニ就キ觀察シ、口蓋扁桃腺ノ肥大度ハ口蓋弓ヨリ咽頭内ノ肥大ノ程度ヲ以テ決定スルコトハ極メテ困難ナモノデア

リ、又之ヲ以テ手術ノ適應症ヲ定メルコトハ不合理デア。即チ手術的操作ヲ加ヘル前ニ個體ニ與フル障礙、病歴、殊ニ扁桃腺性病竈感染ヲ重視シテ慎重ニ適應症ヲ考フベキデア。

目 次

第1章 緒 言

第2章 調査材料並ニ調査成績

第1項 年齢ト口蓋扁桃腺重量トノ關係

第2項 臨牀上ノ大サト口蓋扁桃腺重量トノ關係

第3項 病的症狀ト口蓋扁桃腺重量トノ關係

第4項 臨牀上ノ大サト年齢トノ關係

第5項 臨牀上ノ大サト病的症狀トノ關係

第6項 左右口蓋扁桃腺重量ノ比率

第3章 考 察

第4章 結 論

第1章 緒 言

曩ニ松田教授ハ口蓋扁桃腺ノ露出部ト埋没部トノ比較ニ就テ報告セラレ、ソノ全體積ニ對スル各部位ノ百分比ハ各年齢ニヨリ異ナリ露出部ハ38.53%、埋没部ハ61.46%デアツタト述ベラレテキル。コノ數値ヨリ見ルト露出部ハ埋没部ニ比シテ遙カニ小サイモノデアルコトガ知ラレ、日常診療ニ際シ口蓋弓間ニ現レル口蓋扁桃

腺(以下口扁桃略ス)ノ状態ニヨリ、ソノ肥大度ヲ決定スルコトノ極メテ難事デア。ルーツノ示唆ヲ與ヘラレタ。

私ハコノ業績ニ對シ、深イ關心ヲモチ、口扁桃ノ重量測定ヲ行ヒ、之ヲ觀點トシテ、口扁桃ノ肥大度ニ就テノ2, 3見解ヲ得タノデ茲ニソノ概要ヲ敘述シテミヤウト思フ。

第2章 調査材料並ニ調査成績

調査材料ハ昭和16年4月—11月, 昭和17年8月—10月ニ至ル間ニ於テ富山縣産業組合病院耳鼻咽喉科ニ於テ, 適應症アリト考ヘ私自身別出手術ヲ行ツタ全症例100名200個ノ口扁デアル。尙之等ハ別出後直ニ薬局用天秤ニテ計量シタ。

平均値ノ比較ニハ

$$\frac{M_1 \sim M_2}{\sqrt{\frac{m_1^2 + m_2^2}{2}}} > 3 \text{ヲ有意ナリトシ}$$

$$\frac{M_1 \sim M_2}{\sqrt{\frac{m_1^2 + m_2^2}{2}}} < 3 \text{ヲ有意ナラズトシタ。}$$

第1項 年齢ト口扁重量トノ關係

第1表 年齢ト口扁重量トノ關係

年 齡	數	最大—最小	平均 値
10 歳 以下	46	5.37—1.28	3.28±0.16
11歳—15歳	74	7.76—1.89	3.98±0.15
16歳—20歳	58	8.20—0.75	3.86±0.18
21歳—25歳	14	7.85—2.75	4.08±0.44
26 歳 以上	8	6.56—1.38	3.64±0.54
計	200	8.20—0.75	3.78±0.09

各年齢ト重量トノ關係ヲ觀察スルト10歳以下ハ各年齢ニ比シ重量ハ小デアルガ, 其他ノ年齢相互ノ間ニ於テハ誤差範圍内ニアル。即チ年齢的ニ重量ノ大小ハ認メラレナイ。尙全般ヨリ見レバ最大8.25g 最小0.75g 平均重量ハ3.78g±0.09 デアツタ。

第2項 臨牀上ノ大サト口扁重量トノ關係

臨牀上口扁ノ肥大度ヲ決定スルニ種々ノ見解ガアルガ, 私ハマツケンジエノ方法ニ從ツテ前後兩口蓋弓ノ遊離縁ヲ連ネテ平面ヲ假定シ, コレヨリ僅カニ突出シタモノヲ(±), コレヨリ大ニシテコノ平面ト口蓋垂ノ中間ノ線迄達シタモノヲ(+), コレヨリ内方ニ突出シテキルモノヲ(++)トシ, 又コノ平面ヨリ内部ニ存在スルモノヲ(-)トシタ。ソノ結果ハ第2表ニ示ス。

一般的ニ最大値, 最小値カラミルト, (-)ノ最大ノモノハ(++)ノ最小ニ比較スレバ甚ダ大キ

第2表 臨牀上ノ大サト口扁重量トノ關係

肥大度	數	最大—最小	平均 値
(++)	69	8.20—1.89	4.20±0.17
(+)	79	7.76—1.91	3.52±0.12
(±)	36	7.85—0.75	3.86±0.25
(-)	16	5.12—1.28	2.89±0.26

イ數値ヲ示シテキル。平均値カラ觀察スルニ(++)ハ他ニ比較シテ統計學上大デアルガ, (+)ト(±)ヲ比較スルト(±)ノ方ガ却ツテ大ナル値ヲ示シテキル。

第3項 病的症狀ト口扁重量トノ關係

病的症狀ヲ次ノ3群ニ分ツタ。即チ咽頭ノ狹隘異物感, 嚥下, 呼吸及ビ發語ニ及ボス器械的障礙, 難聽, 咳嗽等ヲ認メルモノヲ第1群, 常習性扁桃腺炎, 關節ロイマチスムス, 微熱, 扁桃腺周圍膿瘍ヲ起シタモノ等ヲ第2群, 扁桃腺炎ニ起因スルト考ヘラレル腎炎ヲ有スルモノヲ第3群トシテ, 之ト重量トノ關係ヲ檢索シタ。第3表ニ示ス通りデアル。

第3表 病的症狀ト口扁重量トノ關係

病的症狀	數	最大—最小	平均 値
第1群	90	7.36—0.75	4.03±0.14
第2群	102	8.20—1.97	3.60±0.12
第3群	8	3.10—1.26	2.08±0.22

之ニヨレバ第1群ハ最大, 次デ第2群, 第3群ハ最小デアル。即チ個體ニ與ヘル障礙ノ著シク大ナリト考ヘラレルモノ程小デアル。

第4項 臨牀上ノ大サト年齢トノ關係

臨牀的ニ我々ガ觀察シ得ル大サト年齢トノ關係ニ就テ觀察スレバ第4表ニ示ス如クデアル。即チ10歳以下及ビ11—15歳ノモノニ於テハ(++)及ビ(+)ガ多ク, (±)及ビ(-)ガ少イ。之ニ反シ16—20歳, 20—25歳, 26歳以上ノモノニ於テハ(++)及ビ(+)ガ減少シ, (±)及ビ(-)

第 4 表 臨牀上ノ大サト年齢トノ關係

肥大度 年 齡	(++)		(++)		(±)		(—)	
	數	%	數	%	數	%	數	%
10j 以下	16	34.8	23	50.0	1	2.2	6	13.0
11j—15j	35	47.3	33	44.6	6	8.1		
16j—20j	17	29.3	17	29.3	17	29.3	7	12.1
20j—25j	1	7.0	6	42.9	5	35.7	2	14.4
26j 以上					7	87.5	1	12.5

ガ多イ。即チ年齢ガ昇ルニ從ツテ、口扁ノ口蓋弓ヨリノ突出ガ少クナル傾向ヲ示シテキル。

第 5 項 臨牀上ノ大サト病的
症狀トノ關係

第 5 表 臨牀上ノ大サト病的の症狀トノ關係

病的の症狀 肥大度	(++)		(++)		(±)		(—)	
	數	%	數	%	數	%	數	%
第 1 群	36	40.0	47	53.3	7	6.7		
第 2 群	33	32.4	30	29.4	26	25.5	13	12.7
第 3 群			2	18.0	3	37.5	3	37.5

第 5 表ニ示ス様ニ第 1 群ハ(++)及ビ(++)ガ多ク(±)ハ少イ。第 2 群ハ之ニ比スレバ(++)及ビ(++)ノ比率ハ遙カニ低ク、(±)及ビ(—)ノ比率ハ大トナル。第 3 群ハ症例ハ尠イガ、(++)ハナク、(±)、(—)ハ他ニ比較スレバ高率ヲ示ス。

レル 0.59 以下ハ僅カニ 6.0%ニ過ギナイ。

第 6 項 左右口扁ノ重量ノ比率

左右ノ口扁ノ重量ヲ比較シ、ソノ比率ヲ算出シテ見タ。ソノ結果ハ第 6 表ニ表示スル。即チ左右ノ間ニ大キナ差異ノアルモノハ少ク、ソノ 71.0%ハ 0.80 以上デアリ、著シイ差アリト思ハ

第 6 表 左右口扁重量ノ比率

比率	數	例 數	百分率
1.00—0.90		40	40.0
0.89—0.80		31	31.0
0.79—0.70		18	18.0
0.69—0.60		5	5.0
0.59 以下		6	6.0

第 3 章 考 察

口蓋扁桃腺ノ重量ニ就テ先人ノ業績ヲ顧ミルト山本、尾曾越、田中、渡邊氏等(昭和 16 年 6 月)ハ 166 個ニ就キ 3.59±0.11、北屋根氏(昭和 16 年 8 月)ハ 609 個ニ就キ 3.68 瓦ト報ジ、笹木教授(昭和 17 年 9 月)ハ 276 個ニ於テ 2.9 瓦ト記載シテキル。笹木教授ノ數値ノ小ナル所以ハ病竈感染疾患ノ扁桃腺ガ手術ノ對象トナツタ爲デアツデ、病竈感染疾患ノ病竈トナツテキル扁桃腺ハ

單純ナ慢性扁桃腺炎ノモノヨリ小デアアルタメ、此ノ様ナ數値ヲ得タモノデアルト説明シテキル。

私ノ測定成績ハ 3.78 瓦±0.09 デ、山本氏等、北屋根氏ノ成績ニ比シ僅カニ大デアアルガ、著シイ差異ヲ示シテキナイ。年齢的ニ觀察スレバ 11—15 歳、16—20 歳、21—25 歳間ノ平均値ハ互ニ誤差範圍ヲ出テキナイガ、10 歳以下及ビ 26 歳以

上ノモノハ之等ニ比較スレバ稍輕イ。之ヲ臨牀上ノ咽頭内ヘノ肥大度ニ就テミレバ10歳以下、11—15歳ノモノハ強度肥大ガ多イガ、16歳以上ノモノハ強度ノモノヨリモ、輕度ノモノガ多クナル傾向ヲ示シテキル。周知ノ如ク單純ナ扁桃腺ハ發育旺盛ナ小兒期ニ於テ最モ著シク肥大スルモノデアアルガ、青年期ニ近ヅクニ從ヒ退行性萎縮ニ陥入ルモノデアアル。カ、ルガ故ニ16歳以上ノモノニ於テハ咽頭内ヘノ突出程度ガ小トナル様ニ考ヘラレル點モアルガ、松田教授ノ報告セラレタ様ニ露出部ヨリモ埋沒部ノ體積ガ遙カニ大ナルモノデアアル事實ヨリ考察スレバ、見カケノミヨリシテ小サクナルトイフヲ退行萎縮ヲ以テノミハ説明出來ナイ。私ハ茲ニ於テ從來記載サレテキル扁桃腺肥大ニ關スル諸統計ニ對シテ多少疑義ヲモツモノデアアル。

次ニ臨牀上ノ大サト重量トノ關係ニ就キ考ヘレバ(+)ノモノハ最大ノ平均重量ヲ有シテキルガ、(±)ノ方ハ(+)ヨリモ平均重量ハ大デアアル。故ニ重量ヲ觀點トシタ場合、ソノ肥大度ハ臨牀上ノ所見ヲ以テハ決定スルコトガ出來ナイ様ニ思ハレル。山本氏等ハソノ成績ヨリシテ年齢的ニハ重量ノ平均値ハ不動デアアル。萎縮ニヨリ重量ガ減少スルトハ斷定出來ナイ。否ムシロ、結締織ノ増殖ヲ伴フ場合ハ却ツテ増加スルカモ知レナイ。ダカラ成人ニ於テハ扁桃腺ハ小ナリトモ相當ノ重量ヲ示シ、小兒ニ於テ大キイト感ジタ肥大扁桃腺モ或ハ輕量ヲ示スカモ知レナイト云ツテキル。併シ重量ノ大小ト扁桃腺ノ病的變化トハ別問題デアアル。

扱テ重量ト個體ニ與ヘル病的症狀トノ關係ニ就キ觀察スルト器械的障礙ヲ有スル第1群ハ最モ重ク4.03瓦、常習性扁桃腺炎、關節ロイマチスムス、微熱、扁桃腺周圍膿瘍ノ根源トナツ

テキル第2群ニ屬スルモノハ3.60瓦、腎炎ヲ伴フ症例ハ少數デアアルガ2.89瓦トナツテキル。即チ所謂扁桃腺炎性病竈感染源ト見做サレル扁桃腺ハ器械的障礙ヲ與フルモノヨリモ輕イ。此ノ點ハ笹木教授モ指摘シテ居ラレル點デ慢性扁桃腺炎ニテハ3.1瓦デアアルガ、微熱、關節ロイマチスムス、腎炎等ノ所謂扁桃腺炎性病竈感染源タルモノノ平均値ハ2.7瓦トナリ、却ツテ小ナル値ヲ示シテキル。私ノ檢索例ニ於テノ臨牀上ノ肥大度モ、第1群ハ(++)ノモノガ多イガ、第2群、第3群ハ肥大度ノ小ナルモノガ多ク、殊ニ所謂埋沒性扁桃腺ト認ムベキモノモ多數ニ存在スルノデアアル。故ニ口蓋扁桃腺ノ手術ニ際シテハソノ咽頭内ヘノ肥大度如何ニ因ハレルコトナク、個體ニ與ヘル障礙、既往病歴、殊ニ扁桃腺性病竈感染ヲ重視シテ手術ノ操作ヲ加フベキモノデアアル。

最後ニ附言シタイノ器械的障礙ヲ與フル扁桃腺ニ對シテ切除ヲ行フベキヤ、或ハ剔出ヲ行フベキヤノ問題デアアルガ、私ハ之等ニ對シ出來得ル限り剔出ヲ施行シタノデアアルガ、扁桃腺ノ機能ノ生理ニ就キ、ソノ歸趨スル所ガ未ダ明カデナイ故ニ果シテ何レガ正シイカ言明スルコトハ出來ナイ。併シ剔出術後ノ經過ニ就キ先人ニヨリ多數ノ報告ガアリ、ソノ效果ニ就キ述べラレテキル所ヲミテモ、之ニヨル機能障礙、發育障礙ガアツタトイフ記載ヲ見ナイ。且ツ幼若時ニ部分切除ガ行ハレタガ、其後遺殘扁桃腺ニヨル常習性扁桃腺炎乃至病竈感染ノ根源トナツタ症例ニ再三ナラズ遭遇シテキル。此ノ如キ症例ヲ顧ミ、器械的障礙ヲ與フルモノニ對シテ剔出ヲ敢行シテキルガ、之等ノ症例ノ經過ニ對シ私ハ興味ヲ以テ觀察スルト共ニ、ソノ終末ニ就キ檢索シタル後解決シタイト考ヘテキル。

第4章 結 論

私ハ適應症アリト認メラレル剔出口蓋扁桃腺200個ニ就キ重量ノ測定ヲナシ次ノ様ナ成績ヲ得タ。

1) 平均重量ハ 3.78 ± 0.09 デ、年齢的ニ觀察スルニ10歳以下及ビ26歳以上ニ於テハ稍輕量ヲ示シテキルガ、11—25歳ノ間ニ於テハ差異ヲ認

メナイ。

2) 臨牀上ノ大サト重量トノ關係ニ於テハ強度肥大ノモノノ重量ハ大デアツタガ、中等度肥大ノモノハ輕度肥大ノモノニ比シテ、却ツテ輕量ヲ示シテキル。

3) 病的症狀ト重量トノ關係ハ器械的障礙ヲ與フルモノハ最モ大キナ數値ヲ示シ、次デ常習性扁桃腺炎、關節ロイマチスムス、微熱、扁桃腺周圍膿瘍等ノ原因トナツタモノノ重量之ニ次ギ、腎炎ノ根源トナツタモノノ重量ハ最モ輕

カツタ。

即チ以上ノ事實ヨリシテ、口蓋扁桃腺ノ肥大度ハ口蓋弓ヨリ咽頭ヘノ突出ノ程度ニヨツテ簡單ニ決定サレルモノデハナク、又之ヲ以テ手術ノ適應症ヲ定メルコトハ不合理デアル。個體ニ與ヘル障礙、既往病歴、殊ニ扁桃腺性病竈感染ヲ重視シテ手術的操作ヲ加フベキモノデアルト考ヘル。

拙筆スルニ當リ御校閲ト御教示ヲ賜ツタ松田教授ニ深甚ナル謝意ヲ表スル。

主 要 文 獻

- | | | | |
|-------------------|-----------------------------------|---------------------|-----------------|
| 1) 細谷, 山本, 扁桃腺病學. | 2) 松田, 大日本耳鼻咽喉科會44回總會抄録. | 北屋根, 中央醫學, 10卷, 8號. | 5) 笹木, |
| | 3) 山本, 尾曾越, 田中, 渡邊, 民族衛生, 9卷, 2號. | 4) 日本耳鼻咽喉科全書, 7卷ノ1. | 6) 同人, |
| | | | 臨牀醫報, 14卷, 35號. |